

●高澤良一 第十一句集 石鏡

●十月―十二月

看取りの日々芙蓉は花を幾つもつけ
かまつかのこれが限度といふ紅蓮
看取るもの看取らるるもの天高し
除けきれぬ雨の小道の猫じゃらし
数珠玉や使い途なき三角地
追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木
金網の外にも内にも猫じゃらし
ねこじゃらし老若の穂の入り混じり
お年寄駄菓子ほおぼる敬老日
黄落どき葉っぱのフレイディ舞ふ林
点線の虫音と棒線の虫音
朝寒し犬は糞まるもの糞りにけり
足揃え搏たれし秋の蚊なりけり
美術の秋上野にぽんと降り立ちて
空の澄み一つとっても奥会津
秋雨が降れば抱へて取り込みもの
無患子鎌倉 宝戒寺のよく落つ頃を訪はまほし
秋の夜の明るさ違え二夕間の灯
秋風が攫ひに来るよ机上のもの
川渡りかう来し猪と事細か
言いぐさの猪より荒く猪貶す
余所者に聞かせて猪の悪さごと
かうすればああ出る猪のいと憎しと
峡住みの畑作猪と根ン比べ
誕生日より栗づいて栗ご飯
だいぶ手を抜かれ案山子のご面相
月光に育つくわりんと思へりき
ののさんに一つことしの庭の柿
仲秋の雲片づけに風が出て

独酌の間あわひを夕月移りつゝ
夕月の色のいよいよ栗きんとん
酒のあと水恋しくて夕月夜
頂けり中に生傷ある柿も
月よりも慎ましきもの対ひの灯
言うなれば奉書の明るさ花すすき
露の浜犬にも流行りすたりあり
秋草のこの名も妻の知るところ
せいぜい知る秋草の名を独りごち
秋風に浮き足立てるものばかり
蚊除けスプレーたっぷりかけて子を放つ
へくそかづら駄花のみかは実もあるぞ
朝の川鰻の一つも跳ばぬかと
雄日芝はざつくばらんを通しけり
句作りに博識要らずイヌコウジュ
穂絮の他軽んずものに植物通
雑草あらくさにいちいち名あり秋の野辺
おとつと露のまだ干ぬ草っ原
種子零す鶏頭いやはやひどい形なり
エンゼルトランプチャーチ教会の庭に垂れ
狗尾草も庭草の裡愛で暮らす
お隣お裾分けりのなかなか大きくならぬ柿
明日の良夜待ち切れざれば酒無心
白帯びて満月の路地愛はしきやし
満月はいつもここより家並の間あひ
飛石に載りて迎へる今日の月
横須賀良長院下田稔の墓
稔の墓お隣りの墓菊とりどり
潜水艦霧雨隠りにその艦尾
狗尾草濡れぬやう穂の出来てをり
ど忘れ夫婦の話題弾みて衣被
紅芙蓉手荒な風を嬉びて

くわりん酒のとり後ひく三年もの
くわりん酒に目のなき妻のとんとり
いかんともしがたき空やけふ無月
浮かぬ空模様十五夜台無しに
いちまつ望みはありてけふの月
ぬうぼうと無月の家路辿るなり
朝露にあらあら濡れてしまひけり
秋雨に時折びくんと躍れる葉
筆ささと芋銭のスケッチ秋の生りもの
ひらがなで大きく書かれうんどうかい
運動会みんな手を挙げゴールイン
ちよこまかがちよこまか抜いて運動会
徒競走シャッターチャンス一度きり
列車音稲田をキタカタキタカタと
山麓を横へ横へと稲雀
稲雀何處へ飛んでも磐梯山
磐越西線稲の睡気が移りさう
民宿裏磐梯の帳場あづかる通草籠
湖畔亭檜原湖紅葉そこそこ客そこそこ
一鳥五色沼も降ろさず秋の沼の雨
がまずみの実の赤雫切りにけり
青どんぐり雨明りして山の道
讚集めをり山中の櫨紅葉
紅葉狩こゑ掛けられてこゑ返し
紅葉狩雨の足許ばかり見て
そこはかともみづる沼の名無し草
張子人形喜多方陸軍さんの髯露けし
稲刈りがもう済み虚空蔵さんの村
味噌蔵蔵屋敷の土塗り引き戸秋寂びて
杉玉大和川北方風土館に喜多方の秋紛れなし
ぐい呑みを買ひ足すこともまた秋意

蔵店は月見名残りの芒活け
試し飲み弥右衛門さんの今年酒
一升瓶千本分の新酒樽
喜笹屋旅館多方の蔵もつ宿の鶏頭図
起きあがり小法師ゆらゆら立てる秋
商秋の白虎堂とは菓子舗なり
杉飯盛山落葉惨と散り敷き自刃の地
舞い込める青葉いちまい自刃の間
鶴ヶ城櫓々に秋の風
天守閣あきつがこんな所まで
秋晴れの天守閣より生徒のこゑ
秋雲の移ろひ易く鶴ヶ城
蔵店末廣酒造の土間まっさきに秋の暮
秋の遠足車内さながら鶏舎のごと
安達太良山晴れてあきつを湧かす谷
親孝行おやこうこてふ名の十六ささげ干す
爽安達太良山別称やかに土地人の云ふ乳首山ちちくびやま
二本松十万石の秋日和
東京より俳優わざおき招き菊花展
菊人形池田屋騒動真っ只中
おん齡に始まり菊師の行脚談
菊人形吉良上野介平伏す
大砲おおづつを差配の隊士菊人形
観菊の接待二本松婦人会
菊花展城の階きざはし水打って
蹲り菊師むしろに根仕事
独眼流正宗の菊差し替え中
繕*ヤロウは藺草の中でもつとも強靱なもので畳などに使うひの藺草はヤロウ菊人形
秋も半ばの東京より来て智恵子のそら
秋興観世寺 黒塚の智恵子生家の間取りかな
稲積観世寺 黒塚みのもしや狸の化け損ね

出で立ちは郷士のさまに群むれ稻ぼ棒ち

二本松駅にも佇たせ菊人形

菊花展けふより始まる城目指す

気に入らぬ箇所をとことん老菊師

莫蔭いちまい引き延べ菊師一仕事

莫蔭いちまい丸め着せ替え了ふ菊師

老菊師修行時代をいくさり

菊人形面輪面輪に目がゆきて

見たきもの先づは菊師の仕事ぶり

城内の厠拝借老菊師

引きつけて離さぬ菊師の話っぷり

家苞は菊師の雑談与太咄

菊人形胸元疎ならず密ならず

馬っこはいささか手抜き菊人形

菊人形「たいしたもんだ」とこゑ拳がり

在来線乗り継ぎ見ゆ菊人形

二本松晴れの或る日を菊花展

けふ初日の面うち晴れて菊人形

城下まで自転車で来て菊花展

日当れり着せ替え中の菊師の背

老菊師少し生活たつきのことにも触れ

着せながら菊師の一ト生手短に

菊師の談「ここに居付きて五十年」

二自ら云へる夕月で生計たつる菊師とぞ

秋の暮鶴ヶ城出てあらぬ方

手庇に西日当れる鶴ヶ城

唐突と云へば米屋の金木犀

また一寸行って金木犀の家

コスモスの雨来ぬうちの器量佳し

コスモスにぼろんぼろんと雨の降る

くくだくだしき木犀の香に突っ込みぬ

木犀の花屑カレー粉めく散歩
鯨を釣る頭上を鳶の胴ながれ

ここ残し秋刀魚の食べ方知らぬ妻

金木犀腐くたしてふ雨なかりけり

金木犀零れ土塀の瓦に跳ね

金木犀掃く身にもなつて下さいと

日々通る靴音日々散る金木犀

霧雨に箱根七湯めそめそと

自然薯三浦晴子さんの掘り手巧者よ汝が夫は

はたはたが何血迷ふて大井川

川向うざりがに捕りの金谷かな

出水して常水二尺五寸の川

蓼四十五歳で口取りにの咲く家並み外れに口取宿

人足ちちどうしに定年ありて雁渡し

乳通ちちどうし七十八文川の秋

大井神社小流れ巡らせ秋大祭

大井川安堵の神の秋大祭

彫り露けく金魚奉納三百尾

道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒

練り歩静岡県 島田 帯まつりくやつこの毛躰秋の風

元禄より百余度ほど帯まつり

大鳥毛真澄みの空に投げ渡し

中老の扇ひらひら屋台曳

上踊りサアサ島田の夜のとばり

藤娘早抜き自慢の上踊り

上踊り雨の五郎に火蛾飛んで

上踊り一寸法師におひねり飛ぶ

帯まつり杵屋社中と同宿す

ししうどの花のほとりに捨て蒸気

川根茶を車内販売ポンコツ汽車

登山届ポストぽとぽと霧雫

登山帳前黒帽子岳をピストンすと
野ぶだうに湯けむり流れ町営湯
霧冷えの先客ひとり町営湯
けんぽなし昨夜の嵐の落としもの
台風に脚掬はれて百葉箱
鉛筆で叩いて蜘蛛の糸の端
鯉跳ばぬ川を淋しみゐたりけり
初鵜のキィーッとあられもなきこゑよ
しゃくれたる貌のシヨウリヨウバツタかな
けふも亦来啼く初鵜メープルティ
大佛へ向ふ人の頭鵜日和
秋小寒地魚まとめ買ひしたり
大鯉の真水突き上げ野分中
秋霖に家鴨も口をつつしみて
十月の催しものも全て果て
空澄むと旅する定年万万歳
椎の実にづるりと滑りずでんと尻
雑草の実にもうち捨て難きもの
敬老日番組玄米健康法
ポスターに紅葉づる鎌倉始発駅
江ノ電の踏切女郎蜘蛛見上げ
江ノ電の一寸走って鯨の海
蜘蛛の囀に一つの攻防見たりけり
女郎蜘蛛屋敷と云ふに躊躇せず
波間に空瓶ぷかり川崎洋死す秋
ばった跳ぶはた迷惑な跳び方も
家鴨があが云ふなか水草紅葉せり
林檎は駄目柿はなんとか衰ふ齒
新聞の切り抜きジヨリジヨリ冬隣
腫れものに触るが如く熟柿食ふ
スタジイの根の暴走の冷まじや

渋柿に妻はとほほと云ったきり
しじみ蝶躍り越ゆものある限り
しじみ蝶日向の端から端へ飛び
しじみ蝶股間を抜けてゆきにけり
雲脂光り衣をまろび落つ石路日和
鎌倉八幡宮 おとどやま
常磐木の大臣山より色鳥来
初秋刀魚世話焼き口調殖ゆ妻と
越後に地震播磨に颱風なんてえこと
強引に柿ぶっ叩き止めぬ竿
舗道に石榴落ちなば快音放つらむ
疎遠また致し方なし帰り花
月見だんご供えて妻の横坐り
熟れ柿に匙が添えられぬたりけり
山妻旅先等にて路傍の石を拾い集め来る癖あれば
石拾ふ要領をもて椎の実も
また拾ふ団栗拾ってだうするの
椎の実はあらかた落ちたか落ちたやう
けふの団栗加ふきのふの団栗に
これはこれでと云ひつゝ桜紅葉みる
火の始末等して長夜さあ寐よか
風禍・震災かうむる人に澄める月
暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと
芒いつぽん手折りて山に別れ告ぐ
くたくたになるまで遊ぶ秋の暮
やたら生ることしのくわりんだうしやう
菊に佇つ母に一言かけたき日
自転車にて近場の雑木紅葉見に
横浜市立金沢動物園
平日の動物園にくる小鳥
紅葉冷猛禽類は眼をつぶり
ユーカリにつれなく落つる秋日とも
秋日中手をもてあます手長猿
犀の尻釣瓶落しの日を遠に

木の葉舞ひ象はステップ踏むごとし
うそ寒の犀に向ひてグッドバイ
お見事と云ふべき自然薯届きけり
自然生頂く果報ことしもや
自然生届けに長身配達夫
鶉来頬にちよっぴり紅さして
茸楯猿の菌形の生々し
少女等は昔ブルマー運動会
折り返しべったら市を物色す
世間体そんなものはと破蓮
鳩小屋に十月の砂敷き込んで
角力見てをれば辺りの暮れて来ぬ
颱風の眼窩豁然青菜畑
八幡宮ぱらぱら小鳥来そめけり
竜淵に潜む槽ぶねより豆腐揚ぐ
掬ふとき掌におよがせて新豆腐
揚舟の艫の下草もみぢして
錆錨狗尾草の穂の古りて
一筆箋付の自然薯届きけり
居心地のよくてかうなる自然生
大盛の飯に穴開けとろろ汁
菊花展初日の菊に氣勢あり
急霰に家鴨の雄声突つ走る
寐溜めせるバクに落葉のはらはらと
秋霖に心さだまるすさびごと
水の上に返り咲くもの日曜日
隼人瓜ポパイのつくる力瘤
隼人瓜ポパイに敵ふものはなし
苑の芝桜落葉の突っ立てる
何處となく尻に火がつく十一月
スケッチす十一月の塀と坂

鴨すいすい日曜画家の視野よぎり
ハイカラな瑠璃首立てゝ鴨巡る
吾孫美雨に優るもみぢ葉拾ひ来て見する
木孫珠海の実どき己が弾みで珠海しゅう歩む
団栗を莫迦云ひながら拾ひをり
てつきりもみづる筈の漆が小火程度
神の留守タンス預金に手をつけず
二〇〇四年十一月一日発行
新札の樋口一葉長居せよ
縣廳前落葉と市バス駆け抜けて
木の葉散りぶつかる市バス系統図
陸続と落葉降る中市バス来る
デイケアバス黄落に頭を振り振り来
落葉臭き街歩き来て天井
そのうち皆聖樹に伊勢佐木町並木
鈴懸散る一寸だらしのない木々で
踏み鳴らし甲斐ある鈴懸落葉とも
分隊の鴨本隊に合流す
白花瓣やっさもっさの厚物菊
掛茶屋横浜曙町荒井屋は鋤焼き発祥の店に鴨見て風のひやつきぬ
西西の市見て来て牛の荒井屋に
牛鍋を待つ間マフラ―横に置き
牛鍋を堪能しましたモウと立ち
牛鍋屋ぎうとベルトを締めて出づ
佃煮の蝗の脚に突っ張られ
琵琶島の端はなにて鯨のよく釣れる
神の鳩そこ退けそこ退け七五三
黄くわりんのおででこしゃんしゃん日を浴みて
こりゃあびっくり菊に跨りゐる蠅螂
もうそんな季節か風邪のコマーシャル
枯るゝ夜をダイナマイトの綾戸智絵
湘南キャンパス黄葉のもとの生演奏

云ふことをきかぬ障子を外し遣る
植物園大船植物園リヤカー持ち出し落葉搔
火の用心ポスターに「火はおこりんぼ」
懸崖菊あらまあ真つ正面にかな
菊日和奈良の最中を貰ひたる
立冬と聞けば内心ああさうかと
三毛猫の木ボクに爪研ぐ冬はじめ
枯木攀ずあの猫金魚盗った猫
強くなる雨脚を菊怖れけり
雨ありて一色増しぬ山紅葉
菊作り読本仕立てに難易度付し
断ってばかりの家居秋ぐもり
魚食べ骨太らしむ文化の日
足の筋違ふへまして冬籠
痴呆すすむ母と小春のメープルティ
柘の銀漢なせる葉叢中
肌身には感ぜぬ余震柘に
マイペース崩さずにゆく皮ブーツ
靴音も路も単調皮ブーツ
皮ブーツ一直線に路は伸び
乗り合はす電車にぼつぼつ皮ジャンパー
団体用乗降口ある駅の秋
紅葉鳩ノ巢溪谷谿谷手すりがありて大助かり
紅葉づれる断崖秩父古成層
紅葉川聞けばカヌーで下るとよ
紅葉狩眼鏡を拭いてさあこれから
錦繡双竜の滝の秋パノラマの鳩ノ巢荘
瀧けむり双竜の翳帯びにけり
紅葉見る吾らにきのみはし階魚道にも
木の葉時雨今しもグッドタイミング
鳩ノ巢の紅葉愛でつゝ見ず知らず

紅葉冷え薄着後悔してみても
二つ目の吊橋ここも紅葉佳し
無線もて後尾と交信紅葉狩
山女釣れ紅葉に腹を返しけり
危ふきに女近寄る紅葉狩
滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな
紅葉見の序で氷川の三本杉
油瀝青紅葉づる日原街道ゆく
柿紅葉やっぱりよかったこの径で
冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して
冬青空歩きたくなる日を歩く
厠にも菊の明るさ持ち込めり
鱈ちりの箸を落としてもう酔ふや
鱈ちりが冷めて話のちぐはぐに
白湯もってポットを充たす冬始め
妻にとり我は口きく八つ頭
冬廁かはりばんこに席起ちて
並び泛く柚子の寒山拾得と
一区切りつけんか焼藪など食して
山寺の紅葉の日照時間かな
朴落葉掃くといふより片づけぬ
明るさは桜紅葉に優る君
好きなことばかりしてゐて深む冬
敗荷の辺に千年も居るごとし
敗荷に天下泰平たるまなざし
片づけて片づけきれぬ杜落葉
否応なく踏むべくありぬ朴落葉
鋤焼をつつくに淋し頭数
初鵬のこゑ張り上げてご挨拶
鼻毛まで枯れてゐるとは壁鏡
慣れっこなってしまひぬ大噓

白式部賢者の智慧を見るごとし
枯蠅螂一太刀手合はせ願います
度忘れは人ごとでなし枇杷の花
菊活けて後片づけの葉のにほふ
大巖が行く手を塞ぐ紅葉川
予報士が雲を動かし霜予報
横文字を車中に拵げ木の葉髪
皮ブーツ肩に手をかけ試し履き
凧明治神宮に乗馬倶楽部の看板鳴る
白息を吐きつ一体馬と騎手
躍動する馬と女とその白息
西の衛士詰所の前の落葉搔
菊花展即ち煙草慎みぬ
冬の噴水モービルアートめく動き
練兵場たりし跡地を落葉馳せ
内科B外来咳を持ち込んで
先生になかなか呼ばれぬ木の葉髪
東京の落葉こそつく通院日
木犀を散らして夜間飛行音
黄菊咲く花菱アチャコの笑顔して
冬雨といふ物音の今四辺
木の葉時雨股旅姿の吾を想ひ
割干下田稔兄の辺の雑談が最期となり
鉛筆は皆とんがらせ冬ごもり
裸木となりて歴然瘤櫟
冬帝に云はれてそこに立つてゐる
櫟今すっぽんぽんに気負ひなし
落葉踏みしだく韻きの新世界
羽抜鳥沽券も意地も疾うに無し
飛ぶときは貌を斜めにしてバツタ
厚着もそもそ腕まくりして注射かな

滑り台欠伸してゐる落葉どき
柿紅葉にしたき一級品
注射あと何處かだるくてホットレモン
もたついてつるうめもどきといひなほす
下仁田葱煮ゆる前から崩れさう
様変れど冬の子供の遊びかな
柿もみぢ明りに何ぞ云ひたくなる
地震襲ふその轍中越地震三句忘れ紙懷炉
花鳥風月なんのかんのとマグマの上
御正忌の鯉を空輸の一仕事
蜂の巢の容が風邪の熱の眼に
必殺の機を窺ふや枯蠹螂
てのひらに桜落葉の移り香す
冬迎ふ暮しのリズムアンダンテ
酔漢の駅指しあるく月光裡
酔漢の背を押す夜の落葉風
熱爛や出逢へるひとを大切に
有難味薄るゝ旗日枇杷の咲く
パチンコの勝組のゐる焼鳥屋
独りでに点く冬街灯世は進みふゆともし
ポンジュース*ポンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯などに温もり冬籠冬籠
湯気上げて祖母の世の味ポンジュース
横濱のハイカラ橋に冬の虹ベイブリッジ
冬薔薇妥協なき色不二の白
冬籠手許に置ける園芸誌
葉ぼたんの意気軒昂を買ひ来たる
小春日の声が先づして猫がゐる
身に入みて湯屋閉屋の主の辞
犬の尿ぺんぺん草の枯れし穂に
冬籠り妻と足型見比べて
転進といふ語のふつと稲雀

朝日影海より根府川蜜柑かな
街路樹の木の葉舞へるやマネキンに
着膨れて身につくものは唯ものぐさ
流されてゆかむそのまゝ年の瀬へ
月明に母船の如く吾家あり
横丁に屯し立喰ひ焼鳥屋
焼鳥の串を数へて扱てなんぼ
焼鳥の釣銭脂ぎる掌に
散歩道こんどは何の返り花
手の届く所には無し烏瓜
汽車走らす石炭一屯水七屯
お年寄り許りの結社文化の日
札つきの三毛猫通る文化の日
とり落とす画鋏を探す文化の日
槽底に豆腐屯す神在月
茶房の窓スプレー描きのサンタかな
霜旦の大地登音返すなり
鯊釣の君らの今日の釣果はと・・・
もんもんのもんを破れず縞臍
釣人の眩き鯊に落としけり
鯊は水底で釣師は岸辺で虎視眈々
水底の冥さ帯ぶ鯊釣られたる
潜水艦繫がれ数え日の入江
泛く原理鴨と同じや軍艦は
クイと啼き鷗冬帽掠めゆき
冬の靄東京湾は事もなげ
公園の搔き出し落葉だう使ふ
イヴの電飾庭木をうまく使ひけり
走り根を入れて落葉の吹き溜り
錦木の錦を蔵ふ季来たり
暖房音どすと耳から温もれる

マネキンに更に短くなる日差し
薬局の前を転べる落葉かな
湯豆腐のしかじか是を叙したとて
一体に年寄りじみる歳末吟
優^{やさ}海鼠何を忖度して寸評
氷川丸年の湊に繋がれて
大将が蜜をうんぬん冬林檎
瘦せ瘦せて閉じ金^{かね}現るる古曆
囃子方庭燎^{にわび}に浮かび上がりけり
神楽笛火の粉が先に舞ひにけり
神真似て神の遊びを巫女の舞
神楽歌和すに和^わ琴^{ごん}の蛙^{こゑ}ごゑ
楽人は埴輪のごとし神遊び
神々の遊びを三日月見そなはず
神遊び笛はしゃかりき中天へ
笛颯颯和琴淙淙神楽歌
笛走り和琴は転び神遊び
寺寶なき寺こそよけれ冬満月
駅前^{駅前}の木^木の五、六本聖樹とし
哲学の一つも持てと冬林檎
シヤコバサボテン咲くと泡立つやうに云ふ
緞帳^{緞帳}が下りて来さうな暮れの空
冬に入り兀と鷺鳥の鼻の瘤
年の瀬の渡しにゐたりそぞろ神
授かれる名案に似て返り花
冬の雨明け方一度降ったきり
サンタも出て歳末商戦巻き返し
熱爛^{熱爛}やこの徳利と幾星霜
蒲の絮飛ばす合図をそぞろ神
着膨れ妻よると手貸せば「だいじょうぶ」
葱の管後生大事に何封じ

暇人の覗いて不思議葱の管
一芝居搏ってやろうか枯月夜
つり銭出すオートマトンといふ学問
自販機の原理は
煙草買ひにちゃんちゃんこではおかしいか
眼が生きて佐島の潤目鰯活魚店
うるめ
大つごもり飛行機音のこもる空
柿の蒂つくづく年も詰まりけり
釣れたとも寒の鰈のこんなのが
浪曲に魂揺たますられて逝く年か
懐旧
年の瀬の柱に凭れ虎造節
意地境地そんなもの無く年逝かす
あさつての方に日移り干蒲団
そこ起てば冬の日に透く部屋の塵
寒釣のこつちも見ずに釣れねエと
鶺鴒もとことこ師走歩きして
口鉄砲あまりに鴨の多ければ
白鳥の来る村の地理電話にて
神の留守ゴミの分別微に入り細
くすすすして漫画に魅入る暖房車
電飾の仕掛け昼にてあらはな樹
庭木にも庭木の晩年冬日差
散髪屋覗き一声「こりや駄目だ」
手に取りぬただ何となくこのマフラー
紅玉の皮煮崩れずクリスマス
裘似合ふ大柄スタイリスト
萱刈の廃る日そこに見えてをり
あと五枚だうにかかうにか賀状書
橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ
郵便貯金記帳の音もはや師走
衣食足り団地布団の満艦飾
暖冬のいたづらに梅騙されて

逝く年の片棒担ぎゆくごとし
イヴ近き街ゆくブルゾンポツケに手
屑籠の影が伸び来ぬ大三十日
愛車さる家のホルシェびしょびしょにして年用意
畳屋の畳のしごき納めかな
紅玉煮る砂糖どっさり使ひけり
林檎煮る香が厨より本を読む
なんだこれ皮のぶかぶか蜜柑なる
正月用みかんにもあるしサイズ
どれ一つ話のたねに仏手柑
クリスマス嘉す発光ダイオード
年用意年々妻は手を抜けり
爛熱し弁明する気さらさら無し
鋤焼の煮えてぐつぐつしか言はぬ
鋤焼の鉄鍋大方漁り了へ
おでこよりふらふらと起つ日向ぼこ
懐炉などみつともないが取り敢えず
古曆太田とあるは通院日
黄泉にても鐘百八ツ聴こえをらむ
師走妻少しは休めここに坐せ
冬あたたかシルバ―料金映画にも
反古ひねる快感冬はもうそこに
煤の湯に新しき創古き創
人集まる集まるところに飾売
飾り買ふ高齢同士言交はし
うろ覚え唱歌張り上げ初湯殿
気のつけば財布も持たず暮の町
手に足に掛け湯じんじん冬至風呂
妻の云ふ冬夕焼けをどれどれと
カーフェリー―船首にいっぽん松飾
カーフェリー―渡り納めの水脈太し

冬空を仰いでけふの雲の多寡
冬雲のおもも水平線迄覆ふ
首筋にマフラー絡めカーフェリー
飴・蜜柑など物色し船待つ間
カーフェリー土産売場の安房花菜
船室の一席とりてあらせいとう
甲板に出づれば北風に面張られ
雲間よりスポットライトめく冬日
髪に憑くストックの香も安房土産
浜金谷驛前セキレイ歩みをり
あと五日ばかりを残し浜焚火
咲きたくて花菜うづうづしてゐたり
きしきしと水仙畑を過ぐ羽音
花アロエ漁師臭さの脱けきらず
金盞花保田くるみ呉れしは千葉日報
水仙に富士を配せる入賞作
寒曉の光の痛棒啖ひけり
寒曉の矢面に立つわが瘦軀
曉光に射し貫かれ地の一切
寒曉のその光ゲ徐々に白を増し
冬の暮切羽詰まって翔つ羽音
素浪人風に立ち枯れ棒葎
スピードスケートカチカチバックストレッチ
スピードスケート断トツリンクレコード出る
旧く狭く深き地下鉄十二月
長谷柑生さんよりみかん贈られて
紀州より蜜柑文左の心づけ
着膨れて福神漬を零しけり
柚子湯の柚鎖骨の辺りに寄り着きて
著ぶくれてこの一着に終止せり
奨めらる鮪の三味線・潜水板
言外にくみとれるものおでん酒

木の葉髪刈られ仕上げに耳の毛も

熊ことし荒れて在所に出るニユース

麻酔銃もて撃ち山に戻す熊

格好悼いい川崎洋は冬鷗

チャールストン伴奏バックにスケート露西亞ペア

フィギュアのリフト高々ニューヨークニューヨーク

フィギュア解説ニコライステップとは何ぞ

疾風また旋風ともなりスケーター

十二月八日無風の横須賀港

探偵社の車内広告十二月

トンカチはリズムと心得十二月

東奔も西走もなく年逝かす

柘は気が付く前に散ってゐる

この年を評すに釦の掛け違ひ

煤の湯に冬もすててこサと脱げり

立ち読みの正月気分文芸誌

待ち合はすその眼に聖樹とハチ公と

千両にいい値がついて街師走

焼鳥屋提灯一つ椅子七つ

旧賀状取り出し偲ぶその字面

こすりてもおちぬ袖の煤冬至風呂

野毛飲屋街に繰り出す冬帽子

岡晴夫オカッパルたうたう出たか年忘

亡き人の十八番を唄ふ年忘

極月の針跳ぶ *ALMA TANGUERA タンテを踊る人の心 ALMA TANGUERA

年乗り切る術の一つに宝籤

世は進み飾る聖樹は新グラスファイバー素材

助っ人に聖樹歳末商店街

毎年のことよ聖樹の新趣向

マンションのおねしよの布団あつかんべえ

マスクして歩行の何處かしゃちこばる

極月の魚佐次に魚漁りをり
くるぶしを暮れにぶっつけ大しくじり
SOUVENIR SHOPスカジャン北風に吊り
聖樹置きどぶ板通りの福引所
クリスマスセールにNATOの軍服も
海軍の街に納の水天宮
身に芯のごときものあり日向ぼこ
冬桜花の手薄なところかな
青空を伝ひくる冷え冬ざくら
この路地の日照時間花八つ手
心しておくと答えて年逝かす
暖房は茫々と逝く年の音ぞ
あたたかく家族をつつむ暖房音
努めゐて努め足らざる今年もや
日向ぼこ吾を脱け出て吾を瞻る吾
唯年を送る無策でありしかな